京都大学	博士（工学）	氏名	中尾　聡史
論文題目	日本における土木を巡る心意現象に関する歴史民俗研究		

（論文内容の要旨）

本研究は、土木を巡る否定的意識についての過去から現在に至る民俗の諸相を、各種の民俗的・歴史的記述から概観し、再構成・再解釈することを通じて、「土木批判の背後に、土木を否定する日本の文化基盤が存在する」という仮説を検証することを目的としたものである。以下に、本研究に沿って、得られた知見を取りまとめる。

第 2 章では、土木批判に関する既往研究をレビューし、土木を巡る世相について論じた。本章において、日本において土木行為や土木従事者に対する「汚い」といった否定的意識が、ロッキード事件以前から、継承されていることが示唆された。これらのことを踏まえて、過剰な土木批判が展開されているという表面的な社会現象の深層には、古くから継承されてきた土木を否定する生活意識すなわち心意現象が息づいている可能性があることを指摘した。

第 3 章では、本研究のアプローチとなる民俗学について、民俗学の創始者である柳田国男に着目しながら説明を行った。そして、民俗学の基礎理論とされる定着農業民である「常民」について説明した上で、民俗学において、土木従事者は定着農業民である常民の枠から外れた者であり、特殊職業人、漂泊民、被差別民などの非常民として理解されていることを指摘した。

1980 年代ごろから、民俗学・歴史学において中世・近世における土木従事者が非農業民、非常民であるとする比較的まとまった研究が提出されるようになっており、**第 4 章**では、こうした研究をレビューした。その結果、4.1 では、中世においては、非人や坂の者、河原者と呼ばれた被差別民が、そして、近世においては、河原者などの被差別民を源流とする黒鍬が、土木技術者として土木事業に携わっていた歴史が確認された。2.3 では、被差別部落の人々が土木工事に関わる傾向が高いことを指摘したが、それは、こうした歴史に負うところが大きかったからであると考えられる。また、4.2 では、大地に対して人為的変更を加える土木行為は土地の神の怒りをもたらすものと観念されていたがために、土木事業に際して、土木技術だけでなく、地鎮の呪術も持った河原者や散所、声聞師などの中世被差別民が必要とされた歴史が浮かび上がった。

第 5 章では、日本における今日の土木従事者に対する社会的認識の根底の一端を探ることを目途として、日本史における土木従事者の民俗的事実（歴史実証はできないが、総体としての可能性）について、非農業文化研究の先駆者である若尾五雄の研究を踏まえつつ探索した。4.1 では、土木工事の際に働かされた人形の成れの果てが河童であるという河童人形起源譚から、河原を拠点として治水工事などに関わっていた非常民である河原者や非人、黒鍬などの土木技術者が河童と呼ばれていたという民俗的事実を明らかにした。そして、4.2 では、非常民である鉱山師が鬼と呼ばれていたことを示唆する鬼退治伝説の存在と、五郎兵衛用水を事例に鉱山師のもつ鉱山技術が隧道

京都大学	博士（工学）	氏名	中尾　聡史

掘削の土木技術に転用されていたことを指摘し、これらを通して土木技術者が鬼と呼ばれていたという民俗的事実を指摘した。第 4 章で述べた非常民である土木従事者は、異人視され、河童や鬼といった人間ではない妖怪として常民から差別視されていたことが、こうした伝承から読み取れることを**第 5 章**において明らかにした。

日本の土木の歴史が、差別の問題と関係していることを**第 4 章、第 5 章**で確認してきたが、**第 6 章**では、この土木差別の問題の背景について考察し、現代の土木批判の根底にある潜在意識すなわち心意現象を探索することを目的として、それに関わる民俗的記述に解釈を加えることとした。6.1 では、民俗学の基礎理論とされる「ハレ・ケ」の議論を参照しながら、土木行為によってケガレが生じ、そのケガレに対して、神が怒り、天災や不幸をもたらすと考える「土木に対するケガレ意識」が、4.2 で述べた犯土思想や地鎮の呪術といった諸概念と整合する形で存在していることを指摘した。また、6.2 では、新聞の言説や宮崎駿の映画作品、羽田空港の鳥居の話には、不幸や天災の以前にあった土木行為が、祟りをもたらした出来事として認識する構図が潜んでいることを指摘し、「土木に対するケガレ意識」が現代においても存在していることを確認した。6.3 では、4.1 で述べた土木工事の際に働かされた人形が捨てられて河童になるという河童人形起源譚には、人形流しの構図が見られること、また、そのことから、河童人形起源譚には、土木従事者に土木行為によるケガレを背負わせて不浄視する常民のまなざしが暗示されていることを指摘した。2.2 や 2.3 において、日本において土木行為や土木従事者に対する「汚い」といった否定的意識が、ロッキード事件以前から、継承されていることを指摘したが、こうした否定的意識は、河童の民話に潜む土木技術者への不浄という差別のまなざしと通底していることが考えられる。

以上より、この日本人の精神に古くから胚胎してきたと考えられる「土木に対するケガレ意識」が、非人や河原者などの中世被差別民が土木工事に関わっていたという歴史、ならびに、土木に対する「不浄」という精神的忌避の民俗を形成し、現在の日本の土木批判の民俗的理由を形作っている、との解釈に複数の歴史的・民俗的事実が整合していることが示された。つまり、「土木に対するケガレ意識」が日本人の精神に古くから胚胎してきたという本研究で得られた民俗的知見は、「土木批判の背後に、土木を否定する日本の文化基盤が存在する」という仮説を支持するものと言える。

本研究で得られた知見を共有知化することは、土木に対する不適切な世論形成の問題の緩和、解決への第一歩となり、今後の日本人による土木実践のありように影響を及ぼすことが期待されよう。

氏　名	中尾　聡史

（論文審査の結果の要旨）

公益増進に資する土木事業の実施のためには、理性的な議論に基づく計画・検討が求められる。しかし、近年の日本における土木事業を巡る世論やメディア報道には、過剰とも言えるほどに批判的なものが見受けられ、また、理性的な議論とは言い難いような言説も散見される。こうした近年の土木批判に関する先行研究として、社会心理学や政治心理学からの研究、新聞報道の分析による研究、大衆論からの研究などが挙げられるが、これらの研究では、土木批判が、日本においてのみ、とりわけ強く展開されている理由が十分に説明されていない。

本論文は、以上の問題意識の下、民俗学的視点から日本における土木批判の背景を考察し、日本人の潜在意識の中に息づいてきたと考えられる土木を否定する「民俗」の存在を明らかにすることを試みている。

これにあたり、本論文では、第一に、土木改名論の変遷や、被差別部落と土木との関係に着目し、日本において土木行為や土木従事者に対する「汚い」といった否定的意識が、現代まで継承されていることを確認している。

第二に、民俗学や歴史学の既往研究を整理し、中世においては、非人や坂の者、河原者と呼ばれた被差別民が、そして、近世においては、河原者などの被差別民を源流とする黒鍬が、土木技術者として土木事業に携わっていた歴史を確認している。また、大地に対して人為的変更を加える土木行為は土地の神の怒りをもたらすものと観念されていたがために、土木事業に際して、土木技術だけでなく地鎮の呪術も持つ被差別民が必要とされた歴史が存在することを指摘している。

第三に、土木従事者は、異人視され、河童や鬼といった人間ではない妖怪として常民から差別視されていたという民俗的事実が、河童人形起源譚や鬼伝説から読み取れることを指摘している。

第四に、「土木に対するケガレ意識」が、上記の民俗的事実・歴史的事実と整合する形で、日本人の潜在意識の中に存在してきた可能性を指摘している。

以上のとおり、本論文は、日本において土木批判が展開される民俗的理由を明らかにしたものであり、今後の日本人による土木実践のありように影響を及ぼし得る可能性が期待される。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成３０年２月２１日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行って、申請者が博士後期課程学位取得基準を満たしていることを確認し、合格と認めた。